

学位論文題名

評判維持戦略としての集団内利他行動

学位論文内容の要旨

本論文は、集団内への利他行動の適応基盤およびその心理メカニズムを、最小条件集団を用いた実験で検証した一連の研究をまとめたものである。

社会心理学において集団内への利他行動は「内集団ひいき」あるいは「内集団バイアス」として研究され、基本的に社会的アイデンティティ理論によって理解されてきた。その理由は社会的アイデンティティ理論が提唱される以前の理論では説明できない現象である、最小条件集団実験における内集団バイアスが観察され、社会的アイデンティティ理論が唯一その説明を提出したことにある。最小条件集団実験における内集団ひいきに対して社会的アイデンティティ理論は「人は自己の一側面として社会的アイデンティティを持つ」「社会的アイデンティティにおける自尊心維持・高揚のため、人は内集団に対して無条件に利他的に行動する傾向を持つ」という説明を与えた。社会的アイデンティティ理論はその後、集団状況における心理メカニズムを説明する理論として、社会心理学において一種のドグマ的な位置づけを獲得するに至った。そうした背景を説明したのが第1章である。

適応論的アプローチを用いて社会的アイデンティティ理論とは異なる説明を提出したのが集団協力ヒューリスティックモデルである。集団協力ヒューリスティックモデルでは、人々は集団内に存在する一般交換関係ないし間接互惠性への適応行動としてデフォルトで内集団に対して協力的に行動すると説明する。このモデルに基づけば、集団内に一般交換関係が存在しないことを強調すれば、相手が内集団であっても協力性は高まらないと予測される。先行研究の結果は一貫して社会的アイデンティティ理論では無く、集団協力ヒューリスティックモデルの予測を支持している。それらの研究を概観したのが第2章である。

第3章ではまず、集団協力ヒューリスティックモデルに対する社会的アイデンティティ理論からの反論として提出された Fear-Greed モデルを紹介した。このモデルでは社会的アイデンティティは「内集団の相手は協力してくれないかもしれない」という Fear を低減する働きは無いが、「内集団の相手を搾取してやろう」という Greed の動機は低減されると予測し、それが支持される知見が提出されている。続いてこの反論に対し、集団協力ヒューリスティックモデルを修正した評判維持仮説を新たに提唱した。評判維持仮説では、集団内では一般交換のみならず、直接交換も含めた様々な交換が評判システムによって連結していると仮定した。そのため、人々は集団内で悪評を獲得してしまうことを回避するため

にデフォルトで内集団への利他行動を行なう行動戦略を持つとしたのが評判維持仮説である。独裁者ゲームにおいて、分配者から見て「受け手が自分の所属集団を知っている」場合（相互知識条件）と、「自分の集団を知らない」場合（一方知識条件）では、Fear-Greed モデルと評判維持仮説で異なる予測が導かれる。Fear-Greed モデルからは、独裁者ゲームは Greed のみが働くため、知識の条件に関わらず内集団ひいきが生じると予測される。評判維持仮説では、相互知識条件ではデフォルトの行動戦略として内集団ひいきが生じるが、一方知識条件では評判システムが働かないことを強調しているため、内集団ひいきが生じないと予測される。最小条件集団を用いた研究 1 の結果、相互知識条件では内集団ひいきが生じたが、一方知識条件では生じず、評判維持仮説が支持された。

続く第 4 章と第 5 章では評判維持仮説から導かれる予測を検証した実験を報告している。第 4 章では抽象的な目の絵が評判を気にする心理傾向を引き出し、内集団への利他行動が促進されるとの予測を検証した研究 2 を報告している。一方知識条件のみを用いた最小条件集団実験を行った研究 2 によって、参加者に目が表示されている時には内集団ひいきが生じ、目が表示されてない場合には内集団ひいきが生じないことが示された。評判を気にする心理傾向が内集団ひいきと相関することを示した研究 3 は第 5 章において報告されている。四人のジレンマゲームを用いた実験の結果、自己が他者からネガティブに評価されることに対する敏感性や不安傾向である Fear of Negative Evaluation が内集団ひいきと正相関することが示された。

第 6 章では四人のジレンマゲームを用いた最小条件集団実験を日本人とニュージーランド人に対して行ない、いずれの参加者においても相互知識条件でのみ内集団ひいきが生じるといふ、評判維持仮説を支持する知見を得た研究 4 を報告している。第 7 章では男性のみあるいは女性のみが参加している状況で研究 4 の実験パラダイムを追試した研究 5 を報告している。実験の結果、女性では先行研究の結果を再現したが、男性では一方知識条件でも内集団ひいきが生じた。考察では、男性同士の集団間葛藤状況において、自集団の凝集性を外集団に誇示する戦略によってこの結果が生じた可能性が議論された。

第 8 章では一連の研究結果が評判維持仮説を支持するものであることから、これらの知見が社会心理学あるいは利他行動の進化の文脈に対して持つ意義が議論された。社会心理学の文脈において示されるインプリケーションとしては、社会行動の説明として適応論的アプローチを用いることの有用性が示されているという点が挙げられる。社会的アイデンティティ理論は内集団ひいきという社会行動を社会的アイデンティティという自己の一側面によって説明している。すなわち、社会的アイデンティティ理論は基本的に「自己」に関する理論であり、自己の働きによって集団行動を説明する理論である。本論文によって、そうした自己に基づくアプローチでは最小条件集団における内集団ひいきを説明できないことが一連の研究によって示されている。さらに、それに代わる説明として評判維持仮説を提唱し、適応論アプローチの有用性を一貫して示している。従って、適応論的アプローチを用いることで今後の社会心理学研究がさらに発展していく可能性が本論文によって示

されたと言える。利他行動の進化の文脈に対しては、近年、人間の利他行動の進化メカニズムとして注目されている集団淘汰理論に対して、実証的な反論を行っているという点が挙げられる。集団淘汰理論に基づけば、内集団への無条件の利他行動を持つ個人が適応的であると考えられる。つまり、集団淘汰理論に基づく適応的な人間モデルは社会的アイデンティティ理論が想定しているものと同一だと考えることが出来る。近年、生物学や経済学などの幅広い分野において、人間の利他性がこうした集団淘汰理論でしか説明できないのか、それとも間接互惠性などの個人単位の淘汰メカニズムで説明できるのかが盛んに議論されている。こうした議論に対して、本論文では実際に人々が集団淘汰理論から予測されるような心理・行動傾向を有しているのかという観点から実証的知見に基づいて反論している。従って、本論文の一連の研究は利他行動の進化という社会科学における重要な問いに対して実証研究の立場から重要な貢献をしていると言える。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 山 岸 俊 男
副 査 准教授 結 城 雅 樹
教 授 煎 本 孝

学 位 論 文 題 名

評判維持戦略としての集団内利他行動

本論文の目的は、社会心理学において内集団ひいきの説明原理として扱われてきた社会的アイデンティティ理論に対して、適応論的アプローチに基づく評判維持仮説を提唱し、最小条件集団を用いた実験研究によって両理論の妥当性を比較検証することにある。また、社会的アイデンティティ理論で想定される人間モデルが、近年、利他行動の進化モデルの一つとして注目されている集団淘汰理論が想定する人間モデルと類似していることから、集団内への利他行動の進化として集団淘汰理論が妥当であるか否かを、実験研究を通して検証することも副次的な目的としている。本論文では研究1から研究5までの一連の実験研究の成果が報告されており、これらの研究結果は、基本的に評判維持仮説を支持するものであった。本論文ではこれらの知見を報告した上で、それらの研究成果が社会的アイデンティティ理論などの社会心理学に対して持つインプリケーションに関して議論すると同時に、本論文で紹介している一連の研究が、利他行動の進化を説明する進化理論である集団淘汰理論に対して持つインプリケーションを議論している。

本論文で達成された最も重要な成果は、最小条件集団における内集団ひいきが社会的アイデンティティ理論によってではなく、適応論的アプローチを用いた評判維持仮説によって説明されることを一連の研究によって示した点にある。社会心理学では、集団状況における人間の心理・行動傾向を説明する理論として社会的アイデンティティ理論が一種のパラダイムとして存在している現況を考慮すると、本論文が社会心理学に対して持つ意義は大きい。自己のあり方によって内集団への利他行動を説明する社会的アイデンティティ理論に対し、本論文で提示された評判維持仮説は、人間の心理・行動傾向をその主観的な側面からではなく、(主として)社会的な環境への適応という側面から捉える適応論的アプローチに基づいている。本論文の成果は、社会心理学において自己の反映として社会行動を

説明する立場に比較して、適応論的アプローチを用いることの妥当性と有用性の高さを示している。

同時に、本論文は利他行動の進化の説明に対してもインプリケーションを持つものである。社会的アイデンティティ理論が想定する「集団内で無条件に利他行動する個人」という人間モデルの進化的究極因は集団淘汰理論にあると考えられる。近年、集団淘汰理論を用いて人間の利他性を説明する研究が Science や Nature などの一般科学の一流誌に掲載されていること、さらに、そうした研究の中には最小条件集団における内集団ひいき研究（特に社会的アイデンティティ理論に基づく研究）を引用しつつ、それらが集団淘汰理論の妥当性を示す知見であると主張する研究が増えていることを考慮すると、本論文が社会的アイデンティティ理論や集団淘汰理論では説明できない現象を報告しているという点は、特に強調されるべき本論文の大きな成果である。つまり、人間の利他性の進化という社会科学一般が解くべき大きな謎に対しても、本論文は大きな貢献をなしていると言える。

上にまとめられた本研究の成果は、集団内への利他性の説明に、社会的アイデンティティ理論や集団淘汰理論に代わる説明原理を提示したという点において、心理学のみならず、社会科学全体に対して大きな意義を有している。審査の過程では、特定の状況が評判に関する心理メカニズムを活性化する状況であるかどうかをアプリアリに決定できないのではないかという点についての指摘がなされたが、そうした指摘は今後の研究の中で明らかにされるべき点であり、本研究全体が持つ意義を損なうものではないという点で、審査委員の意見は一致している。本審査委員会は、本論文に示された申請者の研究の成果を高く評価し、全員一致で、本論文を博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであるとの結論に達した。